

2020年度、日本哲学会大会 一般研究発表

隠された内面性から、外的世界との衝突へ ——キルケゴールの「内面性」コンセプトを再検討する試み——

吉田敬介（学習院大学）

1. はじめに：

近代的「内面性」の一モデルとしてのキルケゴール思想

近代の人間理解において、外面と内面とに分けて個人を考察するものの見方は、一定の説得力と自明性をもつものとして受け入れられているようにも思われる。それはつまり、見た目やそこから看取できる行動様式、またその者に与えられた肩書や称号といった言わば外的な側面とは別に、そのような外面に還元されえない内的な意識が——その者だけが感受し、意識することのできるような「内面」が——個々人のもとに存する、という人間理解のことである。とりわけ近代の西洋哲学において、この「内面」の意識は、真理を認識し正しい判断を下すために不可欠な審級としての一定の役割を果たしてきた。R. デカルトの「我思うゆえに我あり」というテーゼは、真理判断における確かさの基準を個々人の内的意識におくという点で、このような人間理解に決定的な表現を与えるものであったと言えることができるだろう。

S. A. キルケゴールの思想は、個々人の「内面」という契機に決定的な重みを与えるこのような思想の系譜に位置づけることができるものである。そのことはとりわけ、彼が客観的な外的世界における真理認識を単なる蓋然性の領分を越えることのないものだとして断じ、それに対して「主体性、内面性こそ真理である」¹というテーゼを提出したというそのことに典型的に見いだされるだろう。少なくともこのテーゼを文字通りに受け取るならば、外的世界で正しいと見なされる事柄や大多数の人間に当てはまる客観的な基準などもはや問題にならず、真理はもっぱら個々人の内面や個々人の内的な決断に存するのだと理解されているということになる。そしてさらにキルケゴールは、このテーゼを展開していくなかで、外的な基準や現われなど一切伴わない内面性の深み——すなわち「隠された内面性」²——においてこそ、真なるキリスト教信仰が実現されうるといふ議論を展開していく。この議論によれば、個々人がキリスト教信仰という真なる生のうちに存しているかどうかは、究極には、他の誰にも共有されることのない隠された内面性によってのみ決せられるということになる。

¹ Søren Aabye Kierkegaard, *Afsluttende uvidenskabelig Efterskrift til de filosofiske Smuler* [1846], in *Søren Kierkegaards Skrifter*, København: Gad 2012 [SKS], Bd. 7, p. 189.

² *Ibid.*, pp. 430-431.

キルケゴールはたしかに、自らの著作において、このようにラディカルに突き詰められた内面性コンセプトを構想しているのである。

しかしこのラディカルな内面性コンセプト——個人の生の価値を「隠された内面性」によってのみ規定するような人間理解——には、少なからぬ疑義が投げかけられうる。重要な疑義の一つは、このような人間理解においては、個々人が真にいかなる心的状態のうちにあるか、何を考えているのかという点が、外的にはまったく認識不可能となってしまう、他者との公共空間に開かれることがなくなってしまうのではないかという問題である。すなわち、もし内面の真理が完全に隠されたものであるのだとするなら、外見上はどんなに清廉潔白に見える者も残虐非道に見える者も、その内心において真にいかなる人間であるのかは外側に窺い知ることはできない、ということになってしまう。このような見方を突き詰めると、自分以外の他人とのコミュニケーションは究極のところ成立しえないということになり、結局のところは自分さえよければよいという個々人の自己完結的態度と、他人については判断を控えようという相対主義的態度とが後に残るということになるだろう。この疑義に関しては、個々人の内面性が外的世界にそのまま提示することができないものだとしても、それが外的世界においていかに表現され、他者に開かれうるのかという点が問われなければならないことになる。

そしてさらなる重要な疑義として、内的真理に強調点をおくキルケゴールの人間観のもとでは、外的世界に対する公正な眼差しが失われ、社会に対する諦念的ないし冷笑的態度が帰結してしまうのではないか、という問題が挙げられうる。すなわちそこでは、社会における人々の営みが等閑視され、人間の生活条件の進歩や改善——それどころか、人間の生に害を与えるような諸条件の排除さえも——が無意味なものとして捉えられかねないのだ。そしてそればかりか、そもそも個々人の内面の意識というものが一定の時代の制約を帯びたものであること、それが外的世界によって条件付けられ、規定されたものであるという基本的な事実さえも、ここでは見逃されてしまいかねないのである。

静かな書齋に座り、そこで自国語でアクセスできる聖書を読み、その章句の意味を反省的に熟考するという信仰の生活もまた、一定の社会的・歴史的諸関係においてはじめて成立することのできる生活条件である。その生活条件を反省せず、外的な貧富の差や身分の差を非本質的なものとするような思想が内面の真理を説くとき、その主張は一種の欺瞞として響きはしないだろうか。端的に言って、何かしらの外的条件によって——たとえば戦争や疫病によって——自分や他者の生活が危機に陥っているその只中で、自分の内面性さえ幸福であればそれで自分は真理のうちにあるという主張がどこまでの説得力を持つことができるだろうか。この疑義に関しては、個人の内面性に強調点を置く思想が自らを条件付ける外的世界への眼差しをいかに担保し、そのような世界との相互関係をどのように反省することができるのか、というその点が問われる必要があるだろう。

いずれにしても重要なのは、このような疑義にもかかわらず——あるいはこのような疑義をも併せもつものとして——「内面性」概念は事実として近代の人間理解と不可分なものである、というそのことである。Ch. テイラーが注目に値する仕方で描き出しているように、「内面性」概念はとりわけ近代西洋の思想史において独自の強調点をもって展開されてきたのであり、それは近代的な人間のアイデンティティを形成する重要な契機としての役割

を担ってきたのである³。すなわち人間の「内面性」は、啓蒙や世俗化が展開していくなかで、時には極端なイデオロギー的な意味を付与されながら、また時には個人の権利を担保するための機能を果たしながら、個人一人一人が担う真理の審級という独自の地位を与えられるようになっていったのである。

キルケゴール的なラディカルな「内面性」もまた、このような近代的「内面性」が展開していく際の一モデルとして理解されることができる。すなわちこの「内面性」モデルは、啓蒙という歴史的プロセスが進行し「外的」な進歩や近代化が謳われるなかで、抑圧されつつ自己主張を行う「内面」の働きを証言するものとして読むことができるのである。本発表が試みるのは、キルケゴールの「内面性」コンセプトをそこに突きつけられる疑義や問題点とともに捉え直し、啓蒙が進みゆく時代ならではの独自の運動をなすものとして提示し直すというそのことである。そしてそれを、ラディカルなまでに「内面性」に強調点をおく思考モデルの問題性と可能性とを考察するための参照点としていきたいと思う。

そのために本発表は、まずもってキルケゴールの「内面性」概念をめぐる——とりわけドイツ語圏の——研究史を概観することから始める。というのもこの概念をめぐる議論は、そのままこの概念がもつ問題性の所在を明らかにし、解釈の道筋を示してくれるものだからである。その上で発表者は、キルケゴールが実際にラディカルな「隠された内面性」コンセプトを提示した著作である『哲学的断片への結びとしての非学問的後書』（以下、『後書』）に目を向け、そこで提示される「内面性」の運動を再構成する。その際には、彼の「隠された内面性」のもつ性格と問題性がより具体的に明らかとなるはずである。そして最後には、キルケゴールが後に展開した「隠された内面性」批判を手掛かりに、それが外的現実とどのように関わり合うのかという論点を考察する。その際には、「内面性」の思想が、ある独自の仕方で外的世界と衝突するその消息が描かれることになるはずである。

2. 独我論や無関心か、それとも外的世界への開かれか： キルケゴールの「内面性」コンセプトをめぐるドイツ語圏の研究

キルケゴールが信仰の外的側面を軽蔑し内的信仰を強調するようなキリスト教思想を展開したことに鑑みると、彼が20世紀に再発見された際——とりわけドイツ語圏において——「内面性の哲学」というレッテルのもとで理解・解釈されたということは、さほど不思議ではないだろう。そこでキルケゴールは、まずもって「内面性」の思想家として評価され、そして批判されることになったのである。注目に値することに、キルケゴールの「内面性」コンセプトをめぐるドイツ語圏の研究史は、その概念の性格と問題性の所在をはっきりと示している。それゆえ本発表も、この研究史を概観することから始めようと思う。

「内面性」の思想家としてのキルケゴール像を最初にはっきりと提示したのは、キルケゴールに関する翻訳や論考によって20世紀前半の所謂キルケゴール・ルネッサンスの火付け

³ Charles Taylor, "Inwardness and the Culture of Modernity", in Axel Honneth / Thomas McCarthy / Clauss Offe / Albrecht Wellmer (ed.) *Zwischenbetrachtungen: im Prozess der Aufklärung*, Frankfurt: Suhrkamp 1989, pp. 601-623; Charles Taylor, *Sources of the Self: The Making of the Modern Identity*, Cambridge: Harvard University Press 1989.

役の一人となった Th. ヘッカーであるだろう。『ゼーレン・キルケゴールと内面性の哲学』⁴ というタイトルのもとで出版されたキルケゴール論においてヘッカーは、晩年のキルケゴールによる教会への論争を弱めて解釈してはならないと断りながらも⁵、社会的・実践的ポテンシャルを持つものとしてよりもむしろ個人の内的信仰にこそ強調点をおいたものとしてそのキリスト教思想を叙述する。ヘッカーによれば、キルケゴール思想は、具体的な個人の人々の生から離れたものとして——「内面性を脱した媒体」として——思考を理解するカント的認識論とちょうど対照をなしており、まさしくその反対の極である個人的な「内面性の質」の真理性を示そうとする試みであるというのである⁶。すなわちキルケゴールのもとでは、あらゆる理論的知を超えたキリスト教の真理は、もっぱら「現実的なものを情熱的に追い求めること」である信仰によってのみアプローチされるものなのであり、その際には「内面性」が真理を判断する唯一の尺度であるのだというのだ⁷。このようにしてヘッカーは、「不安」と「絶望」を探求しながら個人の内面的信仰の重みを極端なところまで先鋭化する「キリスト教的心理学」⁸の展開者キルケゴールを、「プロテスタンティズムの完成者」⁹であるとさえ述べるのである。

ヘッカーのキルケゴール論から20年後に出版された Th. W. アドルノの『キルケゴール 美的なものへの構築』は、ある意味でこのような「内面性の哲学」としての解釈を引き受けながら、その問題性と対決するものである。というのもここでアドルノは、主体の真理性に強調点を置くキルケゴール思想を「客体を欠いた内面性」であるとして特徴づけ、批判を通してその独自の歴史的布置関係を顕在化させるよう試みているからである¹⁰。このアドルノの解釈によれば、キルケゴール的内面性は、「他者性という圧倒的な力によって自分自身に投げ返された」¹¹自我が、外的世界において失われた客観的意味を取りもどそうと主体的内面のうちで超越的意味を求めるその運動の消息だということになる。すなわち、社会や歴史という外的世界から完全に独立した真理の審級であろうとするキルケゴール的内面性コンセプトは、現実には、近代化という歴史のプロセスの只中で無力となった個人の意識の反動的運動の産物だということになる。まさしくここでキルケゴールのラディカルな内面性は、近代化という歴史のプロセスの文脈で解釈され直すことになるのである。

だがアドルノに言わせると、キルケゴール流の心理学的・主観的な「独我論」¹²や「選択の選択」¹³理論の問題は、客体を欠いた内面性を信仰の実現の場だとして絶対視してしまう

⁴ Theodor Haecker, *Sören Kierkegaard und die Philosophie der Innerlichkeit*, München: J. F. Schreiber 1913.

⁵ *Ibid.*, S. 10.

⁶ *Ibid.*, S. 19.

⁷ *Ibid.*, S. 22.

⁸ *Ibid.*, S. 32.

⁹ *Ibid.*, S. 46.

¹⁰ Theodor W. Adorno, *Kierkegaard: Konstruktion der Ästhetischen* [1933], in ders., *Gesammelte Schriften*, hrsg. von Rolf Tiedemann; unter Mitwirkung von Gretel Adorno, Susan Buck-Morss u. Klaus Schultz, Frankfurt am Main: Suhrkamp 1962-1986 [GS], Bd. 2, S. 42-46.

¹¹ *Ibid.*, S. 45.

¹² *Ibid.*, S. 46.

¹³ *Ibid.*, S. 47.

がゆえに、内面性そのものがある種の歴史的・社会的な布置関係の産物であるという洞察に至ることができない。それゆえこの内面性概念は、それが外的世界の具体的事物と関係を結ぶように思われるところでさえも、実際のところは個々の事物を自らの内的運動の「機縁」として場当たりに利用しているに過ぎないのであり、外的な世界に根本的に条件付けられたものとして自らを反省することはできない。だからこそアドルノは、ヘッカーによるような「内面性の哲学」としてのキルケゴール解釈から出発しつつ¹⁴、この内面性コンセプトの客体を欠いたあり方を——その独我論的な自足性と、外的世界への自己関係の反省の欠如を——問題視しているのであり、自らの批判的読解によってそこから客観的・歴史的意味内容を読み取ろうと試みるのである。

このアドルノの解釈に基づくならば、キルケゴールの内面性コンセプトは、それ自体としては社会や歴史といった外的世界との肯定的関係を示すものではなく、独我論的な内面への閉じこもりとそこから帰結する外的世界への冷笑的無関心の傾向を示すものであるように思われるかもしれない。もっとも、キルケゴールの内面性コンセプトを外的世界に背を向けた閉じこもりの思想であるとするようなアドルノの解釈に対して、近年のいくつかの研究¹⁵が重要な異議を提出しているという点は、見逃されてはならない。例えばE. ハーブスマイヤーは、一方で「人間存在の隠された深み」として内面性を描き出すキルケゴールは、他方でその隠された内的信仰を「実存のうちで表現にもたらし」ことを自らの課題としていたという主張をする¹⁶。すなわちキルケゴールは、信仰における「行為」の側面を等閑視する同時代のキリスト教界に「キリストへの倣い」を要求する議論を展開した『キリスト教の修練』に見られるように、「隠された内面性」という客体を欠いたあり方には留まっていなかったというのである¹⁷。さらにM. エングマンは、キルケゴールの宗教的『講話』の広範な分析を通して、その内面性概念が「個人の単なる内的世界」に尽きるものではなく、「社会実践的な兆表のもとで […] 内的な行為でありかつ外的なものにおいて世界に関わるような行為となる」のだと論じている¹⁸。この見方に従えば、キルケゴールの「内面性」概念は、キリストに倣い殉教するという極端なかたちのみならず、日常的な実践においてもまた、外的世界に関わるものだということになるのである。

これらの研究は、内面性へと強調点を置くキルケゴール思想が、少なくともキリスト教信仰の実践を説く文脈では、単なる独我論や外的世界への無関心に尽きるものではなく、むしろ外的世界との肯定的関係を描き出しているという実例を説得的に示している。とはいえ、これらの研究によってなされた反証が、アドルノの批判を正面から引受けたものではないという点は、指摘される必要があるだろう。というのもアドルノの批判的解釈によれば、キルケゴール思想は、それが外的世界と一定の関係を結んでいるように見える場合でさえも、

¹⁴ アドルノ自身、ヘッカーによるキルケゴール論に言及している。Vgl. *ibid.*, S. 47-48.

¹⁵ キルケゴールの内面性概念に関するドイツ語圏の研究史とこの概念のもつ思想史上のコンテクストに関しては、以下を参照：Vgl. Matthias Engmann, *Innerlichkeit: Struktur und praxistheoretische Perspektiven auf Kierkegaards Existenzdenken*, Berlin / Boston: Walter de Gruyter 2017, S. 1-69.

¹⁶ Eberhard Harbsmeier, „Der Begriff der Innerlichkeit bei Søren Kierkegaard“, in *Kierkegardiana* 20, 1999, S. 31.

¹⁷ *Ibid.*, S. 44-45.

¹⁸ Engmann, *Innerlichkeit*, S. 555-556.

実際のところ外的世界を内面の運動のためのたんなる「機縁」へと引き下げてしまっている
のであり、その意味で歴史的な変化への眼差しを欠き独善的な自閉性と無関心のうちに安
らってしまっている、ということになるからである。ハーブスマイヤーやエングマンの主張
はたしかに、キルケゴールの内面性コンセプトが外的世界において表現されるべきもの
として構想され実践的側面を持ち合わせていたという事実を明示してはいる。とはいえそ
のような事実が示されたからといって、この内面性コンセプトがそもそも自らの閉鎖性を脱
し外的なものに——歴史や社会に——規定されてあることを自覚するものであるのかどう
か、そしてもしそのような内面性の運動が可能なのだとすればそれはいかにして生じるも
のであるのかを、説得的に示していることにはならないのである。

本発表はかくして、アドルノの批判的読解を改めて受けとめた上で、次のような問いと取
り組むことになる。それはすなわち、キルケゴール的な「内面性」コンセプト——自己満足
的な独我論と外的世界への無関心の傾向を示すように思われる「隠された内面性」コンセ
プト——が、いかにしてその閉鎖性を脱し、外的な歴史性や社会性に関われるものとなるのか、
という問いである。そのためにはまず、かの「主体性、内面性こそ真理である」というテー
ゼが提出された著作『後書』から、ラディカルな「隠された内面性」コンセプトを再構成す
ることから始める。そしてその上で、この内面性コンセプトが自らの閉鎖性を脱し「外的な
もの」へと開かれていくその運動のプロセスを、そしてそのように開かれた先で歴史的現実
と対峙するそのあり方を、検討していくこととする。

3. 「隠された内面性こそが真なる宗教性である」： 真理としての内面性の規定とその性格

キルケゴールはその著作活動を通して、「外的なもの」と対比しつつ、かつ「外的なもの」
には還元されえないものとして、「内的なもの」を捉えている。そのことは、キルケゴール
の最初期の著作『あれかこれか』の「前書き」が次の一文で始まることに象徴されているだ
ろう。「親愛なる読者よ、もしかしたらこれまでやはり君にも、あの有名な哲学的命題の—
—外的なものは内的なものであり、内的なものは外的なものである、というあの命題の—
—正しさを少しだけ疑ってみるといふ気になったことがあるかもしれない。」¹⁹1843年のこの
時点において既にキルケゴールは、ヘーゲルの『論理学』を示唆しつつ、外的だと言われ
る事柄と一致することのない個々人の内的な事柄にこそ、自らの関心があるのだと宣言し
ている。そしてこのことに対応するようにキルケゴールは、「内面性」概念を展開していき、
ついには1846年の『後書』におけるラディカルな内面性論に至るのである²⁰。

¹⁹ Søren Aabye Kierkegaard, *Enten – Eller* [1843], in *SKS*, Bd. 2, p. 11.

²⁰ キルケゴールの著作活動における「内面性」概念の用法や展開については以下の文献を
参照：Christian Fink Tolstrup „Inwardness/Inward Deepening“ in *Kierkegaard's
Concepts: Individual to Novel*, Steven M. Emmanuel / William McDonald / Jon Stewart
(ed.), Aldershot: Ashgate 2014 (*Kierkegaard Research: Sources, Reception and Resources*,
vol.15, Tome IV), pp. 33-38.

それではこの『後書』における「内面性」概念は、いかなるものなのであろうか。興味深いことにキルケゴールは、この著作において頻出する鍵概念である「内面性」に、さほど明確な定義づけを与えることをしていない。とはいえそれでも、定義めいた記述がまったく見出せないというわけではない。たとえばこの著作の比較的前半には、次のような記述がある。「キリスト教とは精神であり、精神とは内面性であり、内面性とは主体性である。主体性とは本質的に情熱であり、その極致においては自らの永遠の至福に対する無限かつ個人的に関心づけられた情熱なのである。」²¹またさらに後半部には、「内面性とは、神の前で個人が自らに関わるというそのことであり、自分自身において反省をなすことである」²²という言明も見いだされるのである。

これらの箇所を素直に読むならば、キルケゴールにおける狭義の「内面性」概念は、やはり基本的にはキリスト教の信仰のあり方を、とりわけその意識の運動の消息を意味しているということになるだろう。すなわち内面性とは、個々人による主体的情熱のことなのであるが、それは（一つ目の記述に従うならば）「永遠の至福」と結びつくなかで究極の姿をとるものなのであり、（二つ目の言明に従うならば）「神の前で」なされる自己関係や自己反省の運動だということになる。そしてそれは端的に言えば、キリスト教の精神の運動、すなわち信仰であるということになるからである。このように見えると、ヘッカーが示すように、キルケゴールの内面性はまずもって「現実的なものを情熱的に追い求めること」——すなわち個人が自らの現実の生においてキリスト教信仰を実現しようとする——を意味していると言えそうである。

とはいえ見逃すことができないのは、キルケゴールの「内面性」概念がそもそも、このような一般的規定による説明を逃れるものとして意図されているという点である。まさしく上記の一つ目の規定からして、どこまで行っても蓋然性の領域を出ない近似的なものであると断罪される歴史的知識との対照関係のもとで提示されているものである。上に引用した『あれかこれか』冒頭の一文が既に示しているように、キルケゴールの言う「内面性」ないし「内的なもの」は、常に「外的なもの」との対比のもとで——しかも「外的なもの」に対応するものとしてよりも、それと非同一のものとして——理解されている。そしてここで言われる「外的なもの」とは、単に外見や相貌、あるいは外的な肩書や称号といった事柄のみならず、客観的・一般的な規定をも意味している。一般的な「人間」の規定、「市民」の規定、「キリスト教者」の規定——そのような一般的な規定という「外的なもの」に還元されることのない個々人の内面の特異な情熱や反省性の運動、その名づけようのない個別の経験の質をこそ、キルケゴールは「内的なもの」ないし「内面性」と呼んでいる。そしてその究極のものこそがキリスト教信仰であるというのである。

さらにもう一点強調されるべきは、この個別の経験の質であるキルケゴール的「内面性」が、「情熱」という言葉から素朴に連想されるような単なる感情や知覚というわけではなく、動的性格を伴う自己関係として理解されなければならないという点である。先に引用した二つの規定からも明らかのように、「内面性」は、情熱でありながら反省的態度であり、「永遠の至福」ないし「神」という自己を超え出る何ものかと結びついてなされる自己関係の運

²¹ Kierkegaard, *Afsluttende uvidenskabelig Efterskrift*, p. 39.

²² *Ibid.*, p. 397.

動である。この動的運動は、キルケゴールにおいてしばしば「内面化」という言葉で言い表される、情熱的に駆り立てられる反省の深まりのことである。少なくとも『後書』の議論に沿う限りでは、キリスト教の信仰は、イエス・キリストという逆説的存在——永遠でありかつ時間的であるという逆説的存在——を前にしたこの情熱的な反省の深まりを伴うものとして描き出されているのである。

かくして『後書』における「内面性」は、一般的規定を逃れる個々人の特異な経験の質であり、情熱的な反省を深めていく動的な自己関係の運動のことを言わんとしているものとして、さしあたりは理解できるということになる。そして『後書』におけるキルケゴールの議論に従えば、まさしくこの「内面性」は、一般的な規定に還元されえない自己関係的な深まりというその性格のゆえに、外面的な現れを伴うことができないということになる。すなわちそれが一般的な規定という「外的なもの」に解消されてしまえばそこではもはや内的な質が問題にならなくなってしまうのであり、そのような規定によって静止的な拠り所を与えられてしまえば反省という自己関係も自らの歩みを止めてしまうことになる。だからこそ『後書』のキルケゴールは、徹底的に「外的なもの」を逃れた内面性の深まりを——すなわち「隠された内面性」を——キリスト教信仰の理想の姿として称揚し、「隠された内面性こそが真なる宗教性である」²³という言明に至ることになる。まさしくここに、一切の外的規定や一般的定義を逃れた個々人の内なる「隠された」経験の質に究極の真理を見る、ラディカルな「内面性」概念が提示されている。キルケゴールのテーゼ「主体性、内面性こそ真理である」は、ひとまずはこのような意味で理解することができるのである。

4. 非真理と否定性の運動：

外的なものによって引き起こされる内面性の自己同一性の破れ

ここまで、『後書』における言明に基づいて、キルケゴールの「内面性」概念を——とりわけ「隠された内面性こそが真なる宗教性である」という言明において頂点に至るような「真理」としての「内面性」概念を——再構成してきた。既に見てきたように、このように再構成された「内面性」コンセプトは、人間個々人の独自の経験の質や名づけようのないその反省的運動を真理の場だと見なすものであった。このような「内面性」概念は、教会に属しているからとか毎週礼拝に参加しているからとかそのような外的規定に還元されえない個々人の信仰に一定の言葉を与えているという点で、ルター的・プロテスタント的な信仰観に合致するものであると言うことはできるだろう。とはいえそれを哲学的な人間理解として見るならば、やはりそこには、素朴な独我論に通じかねないような一般性や客観性の軽視と内面性の絶対視とが、読み取られるようにも思われる。

もっとも、『後書』のキルケゴールがここまで素朴な内面性の礼賛を行っているわけではない、という点は強調される必要があるだろう。というのも同書においてキルケゴールは、「主体性、内面性は真理である」というかのテーゼとともに、「主体性は非真理である」²⁴と

²³ *Ibid.*, pp. 430-431.

²⁴ *Ibid.*, p. 189.

いうアンチテーゼをも提出し、その相互関係における「内面化」のプロセスに着目するよう求めているからである。曰く、「主体性が非真理でありかつそれでもやはり主体性が真理であるというそのとき以上に、主体性は真理であるというこのことが内面的に表現されることはありえない」²⁵というのだ。ここでは、主体やその内面を単に手放しに真理であるとして賞賛することによってではなく、むしろその非真理性を視野に入れるときにこそ、かの反省的「内面化」がいつそう突き詰められるということが言われているのである。

ここで言われる主体性の「非真理」とは、端的に言えば、個々人の「罪」のことである²⁶。ここで見逃すことができないのは、キルケゴールの言う「罪」が、決して個々人が自分一人の力で発見することができないものであり、外的な力によって外側から知らされなければならぬものだとしてされている点である。「罪人となったことを彼に啓らかにするような力が個人の外になければならない」²⁷という言に見られるように、「罪意識」は、外的な何ものかによって引き起こされる内面的反省の破れなのであり、しかもその内面性が非真理であるというその意識の生成なのである。まさしくこの点において、キルケゴール的「内面性」は、その内面の外にある何ものかに反省的に関わる——より正確に言えば、関わらせられる——ことになる。そして興味深いのは、「実存する者が罪意識を自分で発見するのではなく外から知らされる」のだというこの逆説的な事実によって「同一性が破られる」と、『後書』の最後半部でキルケゴールが述べているという点である²⁸。この言明に従うならば、キルケゴール的「内面性」は、単に独善的に自らのうちで完結するものではなく、むしろ自らの外に存する他なるものとの一定の関係によって自らの自己同一性を破られ、それによってよりいつそうの内面化を遂げるものである、ということになるのである。

まさしくここから、キルケゴール的「内面性」が単なる主体や内面の閉じこもりではなく、むしろ構造的に外的なものとの一定の関係をもつものとして構想されていると主張されることが可能となる。もちろんキルケゴールにおいては、内面性にその非真理を——すなわち「罪」を——告知するこの「外的なもの」としては、キリスト教が想定されていることだろう。とはいえ少なくとも構造的に見る限り、ここで言われているのは何かしらの実定的教義に基づいた教条的信仰の規定であるというより、外的な何かしらのものとの関係のなかで自らの被制約性や限界を自覚せざるをえなくなった——そのようにして自らにまつわる一定の「否定性」を意識せざるをえなくなった——内面性の消息であるということができるのである。キルケゴール的主体の内面はかくして、否定性の意識に貫かれ、否定性の意識と相即するものとして外的なものに関わるということになる。そのような主体については、「否

²⁵ *Ibid.*, p. 195.

²⁶ Cf. *ibid.*, pp. 190-191: 「非真理として主体があるのは永遠においてではない […]。主体は時間のうちで非真理と成ったか、あるいは非真理と成るのである。 […] さてこの個人の非真理を、罪と呼ぶことにしよう。」

²⁷ *Ibid.*, pp. 530-531. ここで言われる「罪意識」は、内在的な反省によって辿り着くことのできる「罪責意識」との対比の上で構想されている。注目に値することにここでは、「罪責意識」の生成によっては同一性が揺らぐことのない「個人の内部における主体の変化」のみが生じるのに対して、「罪意識」の生成によっては同一性それ自体が揺らぐ「主体それ自体の変化」が引き起こされると言われている。

²⁸ *Ibid.*, p. 485.

定的なものを知りつつ織りなす絶え間なき内面化のうちに、彼がもつ肯定的なものが存する」²⁹ということが言われるのである。

まさしくこの点に、キルケゴールの「内面性」コンセプトを解釈する上での分岐点があるだろう。というのも一方では、この否定性の運動までもが内面性の自己完結性に取り込まれることによって、自らを制約するものとしての他なるもの——そのようなものとしての外なる「現実」——との関わりは、その息の根を止められることになってしまうからである。キルケゴールの「内面性」コンセプトが、外的なものとの関わりでなされる自己否定の運動さえをも自らの意のままに引き起こすようなものであるならば、そのコンセプトはやはりその究極には独我論的なもの、外的なものへの開かれを欠いたものだということになるだろう。しかし他方では、この否定性の意識の生成を、自らにとって制御しきれない外的な現実との関わりによって生じるものとして理解してよいのであれば、キルケゴール的内面性は、自らの自己閉鎖性を脱し、自己同一性の破れとともに外なる現実が開かれるものとなることになる。

「内面性とは、神の前で個人が自らに関わるというそのことであり、自分自身において反省をなすことである」³⁰という先に引いた言明はかくして、二義的なものとして響くことになる。それは一方では、神関係をも自らの内面性のうちに引き込む自己絶対視の表明として理解されうるかもしれない。とはいえそれは他方では、自らの内面性の内在的閉鎖性を——欺瞞としての自己同一性を——外からなされる自らの非真理性的経験によって問いに付さんとする内面的自己反省のことであるとも解釈されうるのである。このように見るならば、キルケゴールの「内面性」を、自己絶対視と他者への開かれの間で揺れ動く近代的意識の反映として見るができるかもしれない。そしてここからこそ、近代的内面性は、決定的な意味で外的世界との衝突に至ることができるかもしれないのだ。

5. おわりに：

隠された内面性から外的世界との衝突へ

本発表はここまで、ドイツ語圏における研究史を概観した上で、『後書』におけるキルケゴールの「内面性」概念を再構成することによって、それがいかにして内的な自己閉鎖性と他者への開かれの間を揺れ動いてきたかを確認してきた。そしてそれによって、キルケゴール的な「内面性」が、外的な現実を否定性というかたちで自らの反省に取り込むことによって、自らの自己完結性を破るというその道を示唆してきた。この道に沿えば、キルケゴールの「内面性」概念は、欺瞞としての自己同一性の破れを経験しながら外的現実との関わりを変化させていくような内面性モデルの提示ということになるだろう。

はたしてこれがキルケゴールの「内面性」概念の解釈としてどこまで説得的であるかは、残念ながら本発表の枠の中で丁寧に論じることはできない。それでもこれに関係する事柄として、二つの事実を指摘することはできるだろう。

²⁹ *Ibid.*, p. 84.

³⁰ *Ibid.*, p. 397.

一つは、キルケゴール自身が、1846年の『後書』から数年後のいくつかの著作において、はっきりと「隠された内面性」を論難しているという点である。例えば1849年の『死に至る病』においては、最高度の絶望の形態として自己絶対視する精神のあり方が俎上に載せられ、そのような精神という「絶対的支配者」が「国土なき王であること」、そしてそのような精神が「錠を下ろして閉じ籠った閉鎖性、或いは内面性と呼んでもよいもの」のうちに逃げ込んでいることが論難されている³¹。またさらにキルケゴールは、1850年の『キリスト教の修練』において、「隠された内面性」としての信仰コンセプトが同時代のキリスト教世界において重大な「混乱」を引き起こしてしまっているのだと論難し、「既存のキリスト教界」においては、信仰のための「舞台」が「隠された内面性」のうちに移し入れられてしまっていることによって、外面的な実践についての問いが立てられることがなくなってしまっていると断じている³²。このような言明は、キルケゴール自身が「隠された内面性」の問題性を意識し開かれた内面性へと移行していったことの傍証として読むことが出来る箇所かもしれない。

そしてもう一つ、同じく『キリスト教の修練』においてキルケゴールは、内面性への固執がある種の決定的な既存体制との衝突に至るといふ洞察に至っている。彼はそこで、次のように述べるのだ。

一人の単独個人が既存体制の下に服しようとしなければ、あるいはむしろこの単独個人が、既存体制を全く真なるものとして認めることもせず、それどころかその非真理を咎め、しかもそれに対して単独個人自身が真理のただなかにいるのだと述べるならば、またさらに真理について、それは内面性のなかにこそあるものだと述べるならば、まさしくその瞬間に衝突が起こることになる。³³

本発表で再構成した議論を踏まえれば、ここで言われる内面性のなか真理が、単なる自己賞讃を意味するわけではないことは確かであるだろう。そして注目に値することに、この言明は、キルケゴールが啓蒙や近代化の病理として断じた「既存のもの神格化」³⁴という歴史的事態に対抗するものとしてなされているのである。すなわちここで、キルケゴール的内面性とその外的世界との否定的関係が、一つの具体的形をとることになっている。すなわちここでは、内面世界への引き籠りでも、外的世界を単に冷笑的に眺めるだけの態度でもない、外的世界との衝突が生じているのである。キルケゴールの「内面性」は、近代性から疎外された自己意識のある種の表現として、外的世界との衝突のプロセスをも示唆するものなのである。

こうしてキルケゴールは、啓蒙や世俗化という歴史プロセスのただなかで個人の内面をも画一化し蹂躪してしまう社会の傾向を看破し、それに対抗するようにして個人の内面に基づく社会批判の道を開くことになる。この批判は、キルケゴール自身に言わせれば、あく

³¹ Søren Aabye Kierkegaard, *Sygdommen til Døden* [1849], in *SKS*, Bd. 11, pp. 181-187.

³² Søren Aabye Kierkegaard, *Indøvelse i Christendom* [1850], in *SKS*, Bd. 12, pp. 209-212.

³³ *Ibid.*, p. 95.

³⁴ *Ibid.*, p. 99.

までもキリスト教信仰の実現という唯一の目標に奉仕するためだけになされるものであるだろう。とはいえここから、信仰論の枠に収まらない思想上のポテンシャルを——内的思考と外的現実との関係についての独自の歴史的自己認識・自己表現のための実践的ポテンシャルを——見いだすこともできるかもしれない。このような意味で、キルケゴールの内面性コンセプトから、近代化がさらに推し進められ啓蒙や世俗化のあり方が再検討されつつある 21 世紀のための一つの思考モデルを読み取ることができるかもしれない。